

## 業の調べ——カンボジアの伝統弦楽器チャパイ

岡田知子



「湖畔でチャパイを奏でる老人」の撮影風景  
(1992年、プノンペン市内)

夕映えのメコン川の岸边にひとり座り、ポル・ポト時代の哀しみをカンボジアの伝統弦楽器で歌い奏でる盲目の老人。

壮絶なポル・ポト時代をくぐりぬけ、平和と復興をめざす戦後のカンボジアを伝えるドキュメンタリー番組の締めくくりにはぴったりの光景だ。どこで情報を収集したのか、ディレクターの脳内にはこのシーンが浮かび上がり、カンボジア人助手を使つてたちどころに弾き手を見つけ出した。彼は街の路

地裏にあるトタン屋根のみすぼらしい小屋に住んでいたのだ。数時間後の湖畔での撮影にむけて、ポル・ポト時代の悲惨さを嘆く歌を作詞作曲するように依頼する。弾き手の盲目の男性はその場で快諾した。番組のために新たに歌を作らせるなんて、それって不適切な演出なのではないのか、そもそもそんな短時間に作詞作曲することが可能なのか

と、融通のきかない学生アルバイトだった筆者はもやもやした気分になっていた。

撮影は無事終わり、そして、そのシーンは番組では使われなかった。四半世紀も前の話である。哀しみの表情を浮かべながら魂の叫びを歌うブルースを外国人にイメージさせた歌は、即興性が高く、また依頼人を大切に作る音楽だったのだ。ポル・ポト時代の哀しみも、乞われればすぐに歌にできたのである。その歌はたとえば、このようなものだっただろう。

### 「弟コン・レーンの物語」

これは私の弟コン・レーンの物語／強制労働のとき／私の手を引いてくれた／強い日差しの下で／おそらく午後三時ごろ／コン・レーン、おまえは／何でもよく見えて／若く漲る力／おまえは強制労働の場所まで／私の手を引いてくれた／そこで水牛をつなぐ縄をなうために／コン・レーン、おまえは／みなが腰をかかめて土を掘り返している場所まで／私の手を引いてくれた／そこでチャパイを弾くために／  
一九七七年 おまえは毎朝／私の手を引いてくれた／旧人民が縄をなっている場所まで／そしてその日の終わりには／また手を引いて連れ帰ってくれた／



チャパイの共鸣胴部分  
(2017年、撮影：福富友子氏)

楽しませるために歌い  
語るということである。  
棹の長さは六〇センチ  
にもなり、クロサン  
——その実はカンボジ  
アの家庭料理である  
酸っぱいスープに入れ  
る——という木から作  
られ、共鸣胴はレアン

その伝統弦楽器はチャパイ・ドーン・ヴェーン、つまり「長棹のチャパイ」略してチャパイと呼ばれる。結婚式などで演奏されるカンボジア独特のアンサンブル形式「クメール楽曲」の中のひとつの楽器である。出家式、僧衣献上式などの仏教儀式でソロで歌い語ることもある。そのほかのさまざまな行事に二人で漫才のような滑稽な掛け合いをする。大切なのは聴衆を

私の胸は張り裂けそう／一九七八年／おまえが兄コン・ナイから引き離された日を／思い出し／  
それ以来／私はおまえの名を耳にしない／生きている印は何もない／  
おまえは生きていますのか死んでいるのか／八人の仏陀に祈るのみ／おまえはカンボジアにいるのか外国にいるのか／おまえを想うと苦しくなる／プノンペンに会いにきておくれ／私は大丈夫／私は生きていますから  
『カンボジアの吟遊詩人、コン・ナイ (Kong Nay, A Cambodian Bard)』(2006) より



チャパイのピック  
(2017年、撮影：福富友子氏)

デイーを生み出すことができ  
る。だが本来、チャパイは語  
りをメインとする芸能である。  
メロデイーは語りにはリズムや  
勢いをもたせるものなので、  
メロデイーの型は数少なく、  
メロデイーを前奏や間奏、あ  
るいは伴奏にして、ブツダの  
生涯、釈迦の弟子アングリマ  
ラの物語、ラーマーヤナ物語

の木——寺の境内や湖畔に自生している——から作られる。レ  
アンの木は特別な木ではなく、なければ庭先に生えている  
ジャックフルーツの木でもいい。しかし共鸣胴の形の説明はな  
かなか詩的で、菩提樹の葉の形、あるいは寺院の境界石をかた  
どつているのだという。  
チャパイの弾き手たちの間で語られるチャパイの由来の物  
語もまた、人々が深く信仰する上座仏教と結びついている。釈  
迦が涅槃を求めた道行きは難儀なものであった。釈迦はいつし  
か病に陥ってしまう。そこへ天部が現れ、チャパイを奏でて慰  
めた。そして釈迦にチャパイの調弦をさせようとする。釈迦は  
あまりにもきつく締められたので、弦は切れてしまった。今度はあ  
まりにも弦を緩くしたので、鈍い音になってしまった。次はほ  
どよい強さで調弦したので素晴らしい音になった。こうして釈  
迦は涅槃への道を覚つたのだという。  
二本の弦からは、婚礼の演奏も宴の際の人々の踊りの輪の演  
奏だけでなく、伝統歌謡やポップスの伴奏でも自由自在にメロ



チャパイ奏者の自宅での撮影  
(1992年、プノンペン市内)

やジャータカ最終話の布施太子物語など、いずれも長編の古典文学を語る。長唄や義太夫節のように三味線の伴奏とともに物語を語るのを、チャパイでは一人でこなす。三味線の合方や合いの手のようにチャパイだけを聞かせるところもある。どの物語も厳格なリズムと非常に複雑な押韻によつて構成された数千行の詩句からなる。古典文学以外の歌謡、漫才風の掛け合いは、即興性が高く、内容がどれほど卑猥なものになろうとも、複雑な押韻ルールはあくまでも保つたままなのである。

またチャパイは聴衆があつてこそその芸能でもある。聴衆に対するサービス精神は旺盛だ。本編にすぐ入るのではなく、まず施主を誉め称えること、主賓を中心として聴衆を数え上げるといった口上にたつぷり時間をとる。主賓の地位が高ければ高いほど、主賓に対する挨拶はそれだけ長くなる。聴衆に外国人がいるとわかれば、簡単な外国語を巧みに歌詞に入れる。ここがまずもつて重要なイントロダクションとなり、時間が限られているからといって割愛することは難しい。ところどころに入る聴衆への呼びかけや滑稽な文句は聴衆の心をとらえて離さず、またそれに呼応する聴衆からの掛け声や歓声、拍手で場の一体感が生まれ、盛り上がりを見せていく。だから高い舞台の上で

の演奏を客席で静かに聞く、というスタイルは合わない。

冒頭に登場した奏者はコン・ナイ(一九四六)氏である。実は撮影当時、全国チャパイ大会で優勝したばかりで、国内ではちよつとした有名人になっていた。二〇一四年に人間国宝に認定された際に、国王シハモニから「語りに長けた者」という意味の「カオソル・ヴォーハー」とのタイトルを授けられた。四歳の頃に天然痘で失明してから、将来のことを考え、チャパイを扱うことができた伯父に習い始めたのだと言う。伯父は歌が得意ではなかったため、コン・ナイ氏の学習方法は、伯父が弾くチャパイの調べをその場で覚え、ハミングで再現できるようになったら、帰宅してから、中古で手に入れたチャパイで弾きなおす、というものだったという。そもそもカンボジアの伝統楽器の習得は口頭性が高く、聴覚的な把握に依存している。特に長編の語りを持ち味とするチャパイの奏者として、コン・ナイ氏は、盲目、という点をアドバンテージに変えたともいえる。

欧米の客層を対象として、コン・ナイ氏の演奏によるCD、『カンボジアの吟遊詩人、コン・ナイ(Kong Nay: A Cambodian Bard)』(2006)、『メコンデルタ・ブルース(Mekong Delta Blues — Master Kong Nay & Ouch Savy)』(2007)もリリースされている。またカリフォルニアで結成されたサイケデリック・ロックのデング・フィーバーとのコラボ、ベーシストのベン・アリソン、ギタリストのマーク・リボー、ドラマーのルディ・ロイストンとのニューヨークでのコラボ、ペインターの及川キータのライブインテイングとのコラボなど、コン・ナイ氏は、いやカンボジアの伝統楽器チャパイは、どんなに野心的な試みも退けた

りはしない。

これまで、極端な共産主義を推し進めようとしたクメール・ルーージュが「革命組織は我々の光」と喚ぶのが、ベトナム型の社会主義時代に「米帝主義、ファシスト日本」と叫ぶのが、はたまた現代になって「民主主義」や「人権保護」を怒鳴ろうが、チャパイは身じろぎもせず、平然とその言葉を調べに乗せてきた。その時代、政権、人々が要請、要求するものを巧みに掬い上げ、そのまま歌ってきた。チャパイの調べは定型化されているからこそ、そこに即興性、柔軟性に富んだことばをのせることができる。それは激動の現代史を潜り抜けてきたカンボジア人そのものだ。コン・ナイ氏は言う。カンボジア人にとってチャパイは、善と悪、哀しみ、苦しみをあらわしている、つまり業の調べなのだ。

「宴の終わりに」

上からきた敵さんは／袋になってしまえ／下からきた敵さんは／布団、枕、蚊帳、壺、水瓶、鍋、皿、匙になってしまえ／後ろからきた敵さんは／舟、モーターボート、脱穀機、トラクター、瓦屋根の家、鉄筋の家、ミシンになってしまえ／前からきた敵さんは／ビデオ、マイク、オーディオ機器、鋼琴、鉄筋、一弦胡弓、太鼓、笛になってしまえ／左からきた敵さんは／三輪人力車、バイク、大小さまざまな車、新車になってみなさま方をお運びする／右からきた敵さんは／絹織物、万能布、テトロン、ウール、カナダ、装身具／どうか氷、牛乳、シロップ、ご飯、豚肉、牛肉、水牛肉、海老、カニ、魚、鶏肉、アヒルになってしまえ／どうか酒、ハイネッケン、コニヤック、マーテル、へ

ネシー、カールスバーグになって、飲んでしまえばみんなで元  
気いっぱいだ

『メコンデルタ・ブルース (Mekong Delta Blues——Master  
Kong Nay & Ouch Savy)』(2007) より



第28回福岡アジア文化賞授賞式リハーサルに  
臨むコン・ナイ氏 (2017年、撮影：福富友子氏)

### 〈参考文献〉

- 大和田俊之 二〇一三「憂鬱の系譜」『民謡からみた世界音楽——うたの地脈を探る』ミネルヴァ書房、五三―七二頁
- 徳丸吉彦 二〇一六『ミュージックスとの付き合い方——民族音楽学の拡張』左右社
- 長尾祥子 二〇一三「ホールでうたう」『民謡からみた世界音楽——うた

の地脈を探る』ミネルヴァ書房、一五七―一七四頁

長谷川町蔵・大和田俊之 二〇一〇 『文化系のためのヒップホップ入門』

アルテスパブリッシング

Keo, Dorivn and Yun Theara, et al. 1994.

Traditional Musical Instruments of Cambodia. UNESCO.

Maison des Cultures du Monde. 2003.

Kong Nay Un barde cambodgien : chant et luth chapey. INEDIT

▽<https://www.maisondesculturesdumonde.org/sites/default/files/albums/>

booklet260112.pdf> 二〇一七年十一月五日アクセス